
音読実践についての考察・序説

中 川 武

要約

本稿は、音声活動を主体とした、共通英語科目（必修）シラバスの構築に向けて、現在著者により実施されている「音声言語（聞くこと・発音すること）を中心とした」パイロット授業の理論的背景および課題について述べる。音読活動の促進が意味理解の補完となることは複数の研究者により実践報告がなされており、一定の理解が得られつつあるが、実際にどのような活動を展開するかに関して、基本認識や条件が異なり、十分な効果が得られない場合も想定される。「(特別な機器を持たない) 一般教室で」「大人数で」学習するという、課題の多い環境の下で、どのような授業展開が可能かについて考察し、教育の質および効果の向上を目指すものである。

キーワード：音読 シェドーイング シラバス 評価 リメディアル

1. なぜ音読か

日本人大学生の学力低下が指摘されて既に久しく、リメディアル（補習教育）の必要性が学問領域を問わず認められ、各大学において種々の取り組みがなされている現況では、「必修科目」として設定されることの多い、語学系科目を中心としたいわゆる「一般教養系科目」の位置付けについても改めて相応の議論がなされるべき状況下にある。特に英語を専門としない学部学科にありながら、英語科目をあえて必修扱いとする場合に、担当教員が押さえておくべき要件として

- ①受講学生の習熟度やニーズを把握できているか。
- ②適切な教材選択・授業運営がなされているか。
- ③適切な到達度設定に基づいた成績評価がなされているか。

といった点が想起される。1コマ90分という、特に習熟度の低い学生には長いと想像される授業時間をどう効率的に使うか、学生にどんな活動をさせ、教員がどう支援するかといった点を熟考の上でシラバスが構築されない場合、教員、学生の双方にストレスとミスマッチを生み、ただ無為な時間と労力を蓄積し続けるのみとなってしまう。

シェドーイングを含む、音声言語を中心とした指導法については、近年複数の実践研究が報告され、リスニング、スピーキングといった関連分野との相乗効果についても指摘されている。実際に音読を効果的に行うためには、実施や評価の面で考慮しておくべき項目が存在するが、本稿では現在パイロットとして著者が実施している「音読（シェドーイング）を取り入れた授業」について理

論的背景を含め整理し、今後への指針を探ることをその目的とする。

2. 理論的背景

以下、シャドーイングを含む音読（後述の通り、両者が意図するものは別物と見なすべきであるが、本項では音声言語ということで一旦集約する）に関して、鈴木寿一（京都外国語大学教授）の主張を補足する形で、その理論的背景を概括する（主張内容に関しては、一部その表現を改めた。出典元へのリンクは参考文献に掲載）。各設問に対する鈴木の見解に続き、矢印以降を著者自身の見解として加筆したものである。

Q：音読指導で英語力は伸びるのか？

「伸びます。ただ多様な方法で大量に行うことが必要です。Miyasako（2008）は授業時間の4分の1から3分の1を音読指導に充てた結果、内容理解テストの得点と理解を伴った黙読速度の向上を報告しています。宮迫氏は一連の研究で、音読力が全般的な英語能力と相関があることや音読力が向上すると英語力が向上すること、特に成績下位の生徒の伸びが大きいことを実証しています。音読は単語認知の自動化と語彙や文法の内在化を促進し、4技能の向上に効果を発揮します。」

→平素の指導を通して痛感させられるのは、これまでの学習履歴における教室内での音読活動の絶対的な不足である。想像するに、中学・高校の一般教室で実施可能な音読活動には種々の制約があり、教員自身に音読への熱意や積極性が不足する場合、教員によるモデルの提示や主導が不十分な状態のまま、CDを掛け流すといった、形ばかりの消極的な練習に終わってしまう。学生に音読の必要性を認識させた上で行うことが必要で、動機付けが成功すれば、実施時間を増やすことへの抵抗は減少するものと思われる。

Q：音読指導は授業のどこで行うべきか？

「内容理解後と次の授業の最初に復習として行うのが良いです。内容理解前の音読指導は、「発音とスペリングの結びつけと、これから読む英文の内容理解」が目的であると思われますが、効果的とは言えません。1度や2度の音読だけでは発音とスペリングの結びつけが進まないのは、生徒にモデルなしで音読させると、まともに音読できる生徒が少ないことからわかります。（中略）日本人英語学習者の場合、少なくとも大学1年生より下の高校生や中学生の多くにとって、音読することと意味を理解することを同時に行うのは難しいということです。音韻符号化が自動化していない学習者にとって、音読と意味理解はどちらもきわめて認知的な活動であるため、同時にそれを満足に行うことはできず、内容理解後の音読に充てる時間が減って逆効果になります。（中略）「音読をしっかりとやれば、それらの活動がうまくでき、生徒が音読練習に熱心に取り組むようになり、英語力が向上する」という英語学習の好循環が生まれます。」

→前項の指摘とも関連するが、十分なインプット無くして、アウトプットは期待できない。音声指導の場合、CD等のモデル音源を使用するのが一般的であるが、機器などの制約があり、発話スピードを自由に变化させるといったアレンジが難しい場合が多い（本稿ではスピードコン

トロール・セルフモニタリング等の機能を含む CALL 施設の使用を前提としていない)。教員のデモンストレーションによるモデルの提示は授業に活気を与えることに加えて、指導に対する熱意を示す肯定的な機会と捉えられるが、ネイティヴスピーカーと同質のインプットを与えることは難しく、教員自らの向上心が問われる。音声・文字・意味との結び付けに関しては、内容理解のための補完的な学習が必要になる。著者が実施しているシラバスの場合、テキスト本文をプリント化したものを配付し、学生にノート作成を課している。授業の構成として、音読やシャドーイング活動を中心とする回と、プリント作業や問題演習・ノート作成を中心とする回を交互に配置し、展開している。

3. 実施の概要

音読活動を授業に採り入れる場合、学習環境や設備に依存する点が多い。学習管理や個別／全体の演習を容易に切替・指示できる CALL システムの様な、恵まれた環境下であれば一層望ましいが、過半数の中学校・高等学校および大学では、通常の椅子と机が並ぶ教室での授業となり、受講人数も30～40人、あるいはそれ以上というのが一般的なものとなと推測される。ここに習熟度の差が加わると「教育の質」を担保することが如何に難しいものとなるかは明白である。

テキストの選定にも配慮が必要である。音読活動をさせる価値のあるもの、可能であれば音声に関する（アクセント等の）記述や説明の付随したテキストが望ましい。教員が全ての音声情報を必要十分に与えることは不可能なので、ある程度の情報が予めテキストに含まれていると、教員の役割がより明確なものとなる。また意味理解の活動を想定すると、内容が余りに難解なものや、学習者の関心から離れた話題では、音読活動への意欲すら失わせてしまう。

以下、実際のテキスト（Read Aloud, Chapter 7: The Growing Population of Older People冒頭部分）を例に、授業展開について概括する。

It is a well-known fact that Japan's population is aging. In other words, the average age of people in Japan is rising. Fewer and fewer people are having children, and when they do have children, they tend to have only one or two. The problems associated with an aging population have long been discussed. In coming years there will be fewer workers, and more retirees, than now. With fewer people entering the economy, and more people leaving the economy, social services will be squeezed. Who will support all of these retired workers? One answer: the workers themselves.

①教員がモデルとして発音を行い、ポイントを指摘する。(約15分)

原則アクセントの位置はテキストに示されているが、一部補足の必要な箇所について言及を加える。特にアクセントが「強く」のみならず「長く・高く」発音される点にも触れ、モデルを示す。英語らしいリズムを作る上で、脱落する音や連結する音が重要であることを踏まえ、具体的にポイントを指摘しながら、音声情報を繰り返しインプットする。上記テキスト例の中で登場順に列挙すると

*脱落する音の一例

fact[□] that aging[□] rising[□] having[□] tend[□] to associated[□] with
aging[□] long[□] discussed[□] and[□] entering[□] leaving[□] squeezed[□]
support[□]

*繋がる音の一例

It is a population[□] is In other Japan[□] is one or two with an aging
coming[□] years more retirees than[□] now the economy all[□] of
one answer

が挙げられるが、練習の過程において、脱落や連結にある種の法則性があることを意識させる狙いを持たせている。カリキュラム上、本授業では英語音声学の知識やその詳細は扱わず、専門的な解説は極力避けているが、特にグループ単位での演習で、こうした箇所をお互いに指摘させることで、音声言語への関心をより高めていくものである。

②学生による個人練習を行う。(約5分)

グループ練習への準備段階として、まず個人で黙読→音読によるウォームアップを行う。教員はここから机間巡視に入り、特に発音が難しい箇所がある学生を中心にアドバイスを加えるが、基本的には「過度に干渉せず」とにかく学習者自らの発声自体を促す(→発音の細かな訂正やアドバイスは、次に続くグループ単位での確認で学生相互に行わせ、ある程度自己解決させることを目標とする)。テキストがある程度の長さを持つ場合、後半部分はチェックが手薄になる傾向があるので、全体のバランスを欠くことのないよう留意する。

③グループ単位でテキストを参照しながら、発音を確認する。(約30分)

音読活動の根幹となる部分である。先の個人練習を下地に、2～3人のグループ単位による読み合わせを行う。この時間は更に3つに細分化され、(1)テキストを用いた読み合わせと確認→(2)教員が再度モデルを提示し、①よりも大きな単位でシャドーイングを意識した発声練習→(3)読み手以外にはテキストを介さない、シャドーイングによるまとめという段階を経ながら、文字に頼った音読→音声に特化したシャドーイングへの意識を高めていく。最後にクラス全体で教員主導によるシャドーイングを行い、完了となる。

4. 効果の測定に向けて

今後の授業計画整備に向けて、現在パイロット的に実施している種々の音読活動への反応は、以下のアンケート回答を中心とした質的な分析に、その一端が示されている。本節では、履修者の反応からその動向を分析する(同種の内容を集約させ、匿名性を保持する等、記述については内容を改変せず、一部表記を整えた)。

＊音読活動に関するもの

- 音読をたくさんでき、新鮮で良かった。
 - シャドーイングがしっかりできて、英語に更に興味がわいた。とても良かった。
 - 音読で、より英語らしく発音できるようにポイントを提示してくれ、ためになった。
 - 発音が聞き取りやすかった。
 - シャドーイング（音読）を実施することは継続すべき。これまで英語が苦手であったが、頑張れた講義だった。
- 教員側の意図をそれなりに咀嚼し、授業に充足感を得た学生からは通例このような回答が寄せられる。テキストはリメディアル仕様のものを採択しており、必修科目という位置付けから、それ程高いハードルを設定していない。それでも先述の通り、習熟度の差が感想や満足感にも大きな差異を生むことになる。音読を重視した授業展開を行うことは、個別テストや評価の実施に相当の時間と労力を必要とするが、既存の英語学習に挫折感や失望感を持っている一部の学生に再度学習への機会や期待感を与える上で、不可欠な要素である。

＊授業一般・指導法に関するもの

- 丁寧に教えてくれた。分かり易かった。また先生に教わりたい。
 - 授業が独特だったので最初戸惑ったが、慣れると楽しかった。
 - 英語力が身に付く内容で良かった。
- 習熟度の低い学生の中には、これまでの中学・高校の基礎学力の積み上げがなされておらず、ただ教室に座っているだけだった者も含まれる。この状況を再び生み出さないように、比較的平易なテキストを選定し、学生参加型を基本とする授業を心掛けた。特に「よく分からない話を、一方的に延々とされている」と感じさせる状況を回避するために、ポイントを明確にし、冗長な説明や講釈を排除することに徹した。
- 楽しかった。発音の方法を教わって、カラオケで英語の歌が歌い易くなった。
- 英語学習は、教科の枠に留まらない。こうした自分なりの発見が、自律学習へのきっかけとなる。本授業では特に音読活動にも相応の時間とエネルギーを注いだ。学生の間で「やらされている」という受身な姿勢よりも、自ら積極的に活動しようとする機運が見られたことが、このようなコメントに反映されたものと思われる。
- 今までの学校や塾での勉強の仕方と全く違い最初は戸惑ったが、とても刺激を受けた。
- 一斉授業でどのような活動が行われているかは、担当教師の力量に因る部分が大きい。ただ英語を訳読するだけ、といった旧来型の授業は淘汰されつつあるが、やはり大人数（一般的には20名以上とされる）を対象とする場合、制約が多い。そのような授業に慣れた学生にとって、戸惑いを覚えたというのは正直な反応である。無駄を排除し、学習内容を明確にしたことが、プラスの効果を生んだものと思われる。
- 質問を親身に調べて答えてくれたので良かった。
 - 時間が守られていて良かった。

→授業内でスマートフォンの使用を解禁し、辞書機能を効率的に活用させた結果、不明点は極力その場で明確にする意識が高まったと感じられる。繰り返し机間巡視を行い、動きの止まっている学生を積極的に支援するよう心掛けた。授業に対して後ろ向きな態度を見せる学生は居らず、殆どは小さな理解の躓きが原因となっているため、短く適切なアドバイスを加えることで集中力を維持させる効果があったと思われる。「先生が何をやっているか、学生が何をすべきか分からない」曖昧な授業は極力避けるべきもので、授業内でどこに注力すべきかをガイダンスで明確にし、授業を重ねる中で注意喚起を行ったことが、このような肯定的なコメントに繋がったと推測される。

*否定的なもの

- 音読練習の時、うろつくのはやめて欲しい。リズムが狂う。
 - もう少し難しい内容のテキストが望ましい。
 - できない人、追いつけない人に対して注意が厳しい。遅い人の進度に合わせて欲しい。
 - 英語が苦手な学生には分かりづらい。
 - 説明が速く、分り難い。
- 現時点で習熟度別編成を持たない弊害が、学生らの「両極端な」コメントに表れる。推察ではあるが、このレベルを「難しい」と感じる学生は「中学校初期の学習内容」が理解されず、英語に限らず、大学での一般的な高等教育に対応できない（過言すれば、留年や中退の予備軍となる）レベルとされる。ノートに単純な筆写ができない、簡易なテスト内容を暗記できないといった、ディスレクシア（一般的な事象を理解する能力に特に異常がない反面、文字の読み書きに特化した形で困難を抱える障害）を始めとする様々な学習障害を思わせる傾向を示す者が含まれる。主にテスト得点を基準とする入学者選抜により、適切な合否判定がなされれば、この種の学生は選別され、必要に応じた処遇が与えられるべき存在と認識されるべきであるが、実際には多くの学生は、学力試験を経ることなく（基礎学力の有無を問われることなく）入学をし、その後必修科目のハードルを越えられず、延々と立ち往生する結果となる。習熟度の劣る学生向きに説明時間を増やすことは可能であるが、今度は大半の学生から「進度が遅い」と不満が出ることであろう。解決の難しい課題である。
- （シャドーイングではなく）音読で良いのではないか。
- シャドーイングを十分に消化できなかった（と推測される）者からは、音読で十分とする回答が寄せられる。そもそもこの2つは全く意図するものが異なる。従来型の音読はテキストに書かれた「字を目で追いながら読む」活動に終始する恐れがあり、英語本来のアクセント、リズム、イントネーションといったプロソディ（韻律）には十分な関心が払われ難い（一斉授業で行われる型通りの音読は、その大半がこのような形式となる）。また「音読は相応に出来るが、その意味内容を殆ど理解していない」といった矛盾が生じることも想定される。一方シャドーイングでは「耳で音声を聞く→脳で音声を（一部意味的な理解を伴いつつ）処理する→口で発音しながら、次の音声を受容する」という、音読とは比較にならない高次の、より複雑な活動

を行う。前節で述べた通り、シャドーイングが意味理解をも補完する役割を果たすという前提から、「音読の延長線上にシャドーイングが位置する」といった単純な構図ではなく、プロソディへの感覚を養う活動であることを強調する必要がある。

5. 今後への課題

英語の4技能（読む、書く、聞く、話す）を訓練する際に、後者2つを授業内の活動として採り入れる意義は、特に必修科目としてシラバスを構築する際に少なくない。しかし授業運営に影響を及ぼす数々の要素（クラスサイズ、座席配置、評価方法等）を勘案した場合、特に以下の点で考察を深める必要がある。

①実施方法

現行のクラスサイズ（40～50名）では、教員の主導なくペア・トリオ活動を行おうとすると、学生の動きをコントロールすることが非常に難しい状況になる。任意に友人とペアを組ませようとすると、上手く相手を探すことのできない消極的なタイプの学生には、却って居心地の悪いものとなり、出席や学習意欲そのものを一層減退させてしまう可能性もある。また同時に「仲良しグループ」で固まってしまう傾向も少なからずあり、学習活動に対して「継続的な」新鮮さや活気を生みにくいことも想定される。CALLを備えた環境であれば、自由にペア練習の組み合わせを設定・修整できるが、本稿では一般教室での活動を前提としているため、種々の制約を前提とする必要がある。現在著者の担当するクラスでは、3人1組で名簿順に座席を指定し着席させ（このことは出欠確認をより簡便にし、欠席者を特定することでクラス全体に出席継続への注意を喚起する意図も含まれる）、基本的には隣同士によるグループ活動が主体となる。開始時～中間試験期に至るまでの数回で「グループ単位で、協調学習すること」に慣れさせ、その意義を認識させることに主眼が置かれる。学生の様子を注意深く観察しながら、一部の学生を入れ替えることでメンバーの変更を行い、倦怠感を避けるといった工夫が必要となるが、例えば特定の学生を指名して恣意的な配置替えを行ったりすると、能力差に因るものではないかといった余計な不安を学生に与える点にも注意が必要である。著者が行うのは、例えば縦列に並んでいる学生を、通路を挟んで機械的に交替させたり、時計周りに回転移動させたりすることで一部のメンバーを入れ替え、活動に新たな雰囲気をもたらす効果を狙っている。また50名でペア活動を行おうとする場合、1人の教員が25組のペアをくまなくケアすることは当然ながら物理的に不可能であるため、3人1列で着席させている現行の配置では、トリオでの活動がより現実的となる。またペア活動の場合、成否が相手との習熟度の差や相性に左右される割合が大きく、特に能力差が大きい場合、双方にとってストレスを抱えるものとなるが、3人であれば幾らかリスクを中和させる効果を期待できる。机間巡視による声掛けの中で「グループ単位でどう協調して活動できるかを評価の軸とする」「メンバーが孤立したり活動が停滞しているグループは、時には連帯責任を課す」といった点をさりげなく喚起することで、全体の雰囲気が澁んでしまわない様、常々心掛ける必要がある。学生の特性は多種多様で、協調学習よりも個人でじっくりと活動に取り組みたいタイプの学生も確実に存在する為、90分の中でグループ主体の協

調／個人単位での活動をバランス良く配置することが不可欠である。また以下の評価方法に関連するが、個別での試験を実施する強味として、普段集団の中に埋もれがちなタイプの学生に対して、個別でアドバイスや励ましを与える意義も合わせて重視している。簡潔な言葉掛けであっても、教員から「頑張りを認めて貰えた、励まされた」という自信が更なる学習動機になることは、誰しも経験することである。

②試験実施の方法・評価基準

現行（パイロット授業）の評価は、以下の3つの基準により成される。

- (1) シャドーイング（15回授業の中で2回実施）
- (2) 筆記試験（テキスト内容理解・練習問題の消化状況を問うもの、2回実施）
- (3) 補助プリントを用いて作成されるノートの完成度（2回提出・確認）

シャドーイングをどう評価するか、明確な指標は定まっていない。個別試験によって、

- A（プロソディや発音の正確さに概ね配慮が行き届き、テキスト全体がシャドーイングとして成立しているもの）
- B（一部プロソディや発音に問題は残るが、概ねシャドーイングとして成立していると判定できるもの）
- C（プロソディ・発音の正確さのいずれかに問題があり、シャドーイングが不完全であるもの）
- D（プロソディ・発音の正確さ共に不完全で、シャドーイングとは見做されないもの）

という4段階で採点を行うが、単独の教員による判定（教員自らがテキストを音読し、それに合わせて受験者がテキストなしのシャドーイングを行う形式）である以上、主観が全く排除できる環境下にはない。テキスト付属のCD音源及び再生機器を活用したり、受験者にヘッドホンを着着させた上でシャドーイングを実施させる等の代案は想定しているが、再生スピードを任意に調整できない等の細かな懸案もあり、採用には至っていない。また個別試験であるため、パラグラフ2個相当分（150～200 words、プロソディ評価にはある程度の長さが必要となる）を課し、実技の後で評価とコメントをフィードバックとして与え、履修生の質問に答える等の個別対応を行うと、1人につき「4分」を必要とする。履修者が50名の場合、25人×2回に分割して試験を行う必要がある（別途、試験監督補助員の要請を行い、著者の担当するシャドーイング試験と並行して、もう1つのグループに対して別室で筆記試験を行う形式を採用）。時間的・物理的な制約が多く、相応の集中力と体力が教員自身にも求められる。

概述の通り、実施・評価共に解決すべき課題が少なくないが、これまでの学習形態とは一味異なる、特にこれまでの英語学習に挫折感を覚えてきたタイプの学生に、もう一度英語に向かい合う機会を提供しつつ、質的な保証を目指した授業の構築を試みるものである。

（なかがわ・たけし メディア社会学科）

参考文献

- 門田修平（2007）『シャドーイングと音読の科学』コスモピア
- 國弘正雄（編）（2001）『CDブック英会話・ぜったい・音読・入門編』講談社インターナショナル
- Miyasako, N.（2008）“Is the Oral Reading Hypothesis valid?” *Language Education and Technology* 45, 15–34.
- 中川武・佐藤敏子・山名豊美（2012）「音声指導の重要性—潜在的なディスレクシア学習者のために—」つくば国際大学研究紀要18, 27–40.
- 岡崎弘信・新田晴彦（2006）『英語シャドーイングの達人』国際語学社
- 榎原威征・榎原益子（2007）『Read Aloud 音読で学ぶ大学総合英語』マクミランランゲージハウス
- 佐藤敏子・中川武・山名豊美（2011）「リメディアル教育の実施—教材選択とその効果の検証—」つくば国際大学研究紀要17, 37–48.
- 佐藤敏子・中川武・山名豊美（2010）「なぜ学習効果があがらないのか—学習動機・学習方法と学習効果—」つくば国際大学研究紀要16, 23–39.
- 佐藤敏子・中川武・山名豊美（2008）「英語学習に関する基礎的調査—学習動機と学習方法—」つくば国際大学研究紀要14, 43–59.
- 佐藤敏子・中川武・山名豊美（2007）「大学生の英語学力調査—学習者はどこでつまづくか—」つくば国際大学研究紀要13, 51–68.
- 鳥飼玖美子（監修）（2003）『はじめてのシャドーイング』学習研究社
- 鳥飼玖美子（2002）『プロ英語入門』講談社インターナショナル

音読の理論的背景については、鈴木寿一（京都外国語大学教授）の論説による以下のホームページを部分引用した。

<http://www.eigokyoikunews.com/columns/taishukan/2009/11/qa-1.html>

（2009年11月4日掲載，2015年11月25日閲覧）

Let's read aloud! : how to achieve audio-centered activities

Takeshi Nakagawa

This paper reviews the positive effects on reading aloud, especially shadow reading (shadowing) activities, in the process of setting up the curriculum and making teaching plans. The first section focuses on some theoretical backgrounds and quoted remarks to support the effectiveness of audio-centered activities in a classroom. Next section explains the general class management procedure, based on the example (pilot) syllabus of the author's. The third section presents some of the positive/negative comments from the participants, by examining the assessment questionnaires. For proceeding to further studies, the following elements are left unsolved:

- * how to conduct a valid test and evaluate students' performance precisely
- * how to motivate students for any particular (unfamiliar) activities and
- * what to be selected/assigned for the smoother classroom management.

Most of all the comments of participants are in favor of audio-focused activities, however there are a couple of remaining issues to strengthen and renew the teaching plan, and further data-collections and researches are scheduled.

[Key words] audio-centered activity, curriculum, reading aloud, shadowing, syllabus